スノーフレーク

犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スノーフレーク

【Nコード】
N8798Z

【作者名】
犬

【あらすじ】
魔法のiらんどにおいても同じタイトルで小説を連載させていただいています。しかしそちらはもしかしたら中止するかもしれません。それをこちらのサイトに転載させていただく事になりました。
http://ip.tosp.co.jp/BK/TosBK100.asp?I=dog0815&BookId=4
”人間として”であった結衣，リオ，紫斗，杏夜そして結衣の前に突如現れ結衣の兄と名乗る男：晴弥彼らを取り巻く悲しい現実そし

て恋。

第1話

スノーフレーク。
春に咲く白くて小さな花。
花言葉は
『記憶　純粋　汚れなき心　清純　美』

午前5時。結衣は母親によって叩き起こされた。
ところで、結衣の家はとても貧しい家庭だ。しかしそんな家庭でも結衣の入学を許可してくれた学校が見つかったと言うのだ。
「というわけで、明日が入学式なんですって！もう入学金とか何もかもただで良いって言うから、即決して制服とかまで買ってきちゃったのよ。」
ほら、着てみて！！といわれ結衣は制服を渡された。
「って、お母さん！？これ、間違えてるよ？だってこれ、学ランだよ？」
「間違えてないわよ。あなたの制服はそれなの。」
「どういうこと？全然意味わからないんだけど？えっと女子でも学ラン的な学校な訳ですか？」
「違うわよぉ！先に言っておけばよかったわね。あなたが入学する学校はね、男子校なのよん♪」
「なのよん♪って！！！！そんな無責任なっ」
結衣が困った顔をしていると、母親は深いため息をつきながら真剣なまなざしで話しだした。
「ごめんね、結衣？正直今のこの家の経済的にこの学校ほどいい条件なところは無かったのよ。それにねここの学校の理事長があなたのおじさまなの。だからね、男子校とはいえ、理事長の甥として入

学すれば安心だと思ったのよ。勝手に決めてごめんなさいね。」
「で、でも・・・・・・。」
「大丈夫よ。何かあったらおじさまが何でも良いなさいっておっしゃっていたわ。だから心配しないで？ね？」
真剣なまなざしで頼んでくる母親を断ることは結衣には出来なかった。ただでさえ、様々なやりくりをして立派に自分を育ててくれたのだ。自分の事でこれ以上母親に迷惑をかけたくないと言う気持ちで結衣はいっぱいだった。
「わかったよ。入学する。」
結衣がそういうと、母親の顔が明るくなり
「ありがとう。助かるわ。」
と言った。結衣は母親のそんな顔が見るのが昔から大好きだ。そんな顔を見たくて今まで生きてきた。正直結衣にとってこんな貧しい家庭で暮らす中の唯一の光が母親の笑顔だった。

第2話

　翌日結衣は長くつややかな髪をバッサリと切り男として帝騎高等学校に入学する事を決意した。学校につくと理事長室に案内された。
「理事長、おひさしぶりですわ。」
「あぁ久しぶりだね。この子が君のおじょ・・・・息子さんだね？素敵な子だ。」
「まぁ！ふふふ。」母親はたいそう満足そうな顔をし結衣に挨拶するように促した。
「初めまして。赤城結衣です。今日からお世話になります。」
「ははは。堅苦しいのはやめにしよう。私は君の叔父だ。なにかあったらすぐに私をたよりなさい。」
「ありがとうございます。」
「それじゃ赤城君はクラスに行きたまえ。早くこの学校になじまないとな。君は1年2組だよ。」
「わかりました。」
　人見知りである結衣にとって面識の無い人物と話すのはとても緊張した。叔父である理事長とはいままで一度もあった事が無かったのだ。
　理事長の部屋を出た結衣は1年2組の教室を探した。帝騎高等学校といえばその敷地の広さと建物の豪華さは有名である。そんな広い校舎の中で結衣は男子生徒をかき分けながらようやく教室を発見し、その扉を開けた。そこには、当然男子ｏｎｌｙ。どうせ男子だけなんてむさ苦しいだけで嫌だなと思っていた結衣は扉を開けて驚いた。なぜならそこには美少年ばかりだったのだ。
（そういえば中学のとき女史達がこの学校うわさしてたなぁ。たしかイケメンしか入学できないらしいね。そうかだから2クラスしかないのか。あそうか。）
ととびらを開け一人頭の中で納得していた。はっと我に返ると教室

内の男子達の視線がすべて結衣に注がれていた。女子だったら喜ぶべき状況。だがしかし結衣は男としてこの高校で過ごすとして決意したのだ。男子生徒達がひそひそとささやいている中結衣はあいさつをした。
「は、はじめまして。俺は赤城結衣。よろしくおねがいします！」
深々と頭を下げる結衣に対し
「見た目だけじゃなくお前声まで女みてぇだな。」
「まーいいでしょ。この男しかいない学校に女みたいな存在も必要でしょ。」
「でも俺らもあいつと同レベルって事だろ？納得できねーな」
クラス内の男子は口々に言いまくっている。そんな状況をただ黙って見ているしか無い結衣はどうして良いかわからず困っていた。そんなとき担任らしき人物が教室に入ってきた。
「なにやってんだお前ら！？さっさと席付け！！！！HRはじめるぞ！！！！」
結衣の出席番号は1番。つまり一番前の席だ。結衣が教室内に入り席に着くと後ろから視線が結衣二突き刺さる。そんな中あっという間に時間は過ぎHRも終わりにさしかかり寮の部屋割りが配られるところだった。結衣は理事長の配慮があってか一番奥の方の部屋で一人部屋だった。
HRが終わり結衣は自分の部屋に向かおうとしていたとき3人組の生徒に話しかけられた。
「君、赤城君だよね？」
「そうですけど。」
「君の部屋言っていい？」
「は？」
「はぁ」
「友達になりたいんだよ。」
「いいよなぁ？」
「だめなのか？」

「おい赤城？」
「おいってばーーーーー！！」
「はぁ。別に良いですけど。」
（あーあ。地味に過ごしたかったのになぁ。まぁ良いか３人くらい。）
そして結衣はその３人を自分の部屋に招待した。
これが結衣の運命を左右する出会いだとも知らずに。

第3話

「うわーーーーー！！！！！！すっげー。何この部屋。」
「広すぎだな。」
「お前むかつくなー笑」
「あははーたしかに笑」
　口々に結衣の部屋に対してコメントをする男子生徒達。しかし突然彼らは結衣の方を向いた。
「あぁ、悪い。自己紹介、まだだったな？俺は魅椎木リオ。今はこの学校の生徒会長を務めている。だから学校の事は詳しいから何かあったら俺に頼れよ？」
「はぁ。ありがとうございます。」
輝かしい笑顔で挨拶をしてきたリオにすこし引きぎみで礼をすると話を続けた。
「俺ね、中等部のときから会長やってんの。上の学年とか六夏いねーし蹴落として俺が高校も最初っから会長やる事になったんだ」
俺すごいだろと言わんばかりの口ぶりで自慢してくるリオに対しいかにもチャラ男って感じの男子が挨拶を始めた。
「俺はこの学校の副会長。名前は桐谷紫斗。よろしくぅー。」
(こいつもリオと同じか・・・・・・。ってことは！？)
「そうそう。僕もね生徒会役員なんだ。僕たち皆生徒会の役員なんだ」
その声がする方をむくとさらさらで美しい髪の毛の持ち主で、すらっと背の高い、そうまさに少女漫画に出てくる王子様のような人が立っていた。
結衣は一目見て恋に落ちそうになった。いや、おちたのだろう。だがしかし結衣は結衣自身に言い聞かせる。
(俺は”男”。だめだよ。)
「そ、そうなんですか。」

「うん。僕の名前は高野杏夜。ちなみに会計です。よろしくね。」
(優しそうだな。)
「おい！結衣！？こいつは腹ん中真っ黒だから気をつけろ！！」
「いや、リオには言われたくないね。」
そんな事をいいながらもなんだか楽しそうにはなしている3人をみてくすくす笑っていると、
「結衣、今日はありがとうございました。あしたからは僕たちになんでも聞いてくださいね。明日からよろしくお願いします。」
「あ、こ、こちらこそよろしく！」
「おいっ結衣！！そいつはきをつけろよ！ほんとだから！！」
「アーはいはい。わかりました。会長さん。早く部屋から出てってください。」
「リオずいぶん嫌われたな？」
「う、うるせーよ！！」
「じゃ、今日はお邪魔しました。」
「おやすみ！」
３人が部屋からいなくなると結衣は、最初に４人で入ったときよりも無駄に広く感じた。
今までだって結衣はいつも一人だった。結衣の家族は多額の借金を抱えいつの間にかいなくなっていた父、そしてその借金を返すため毎日遅くまで働く母親。父親の借金返済の為に仕事三昧の母親は家に1週間、1ヶ月かえってこないことだってあった。そんなとき家には結衣一人だった。でも結衣には家があった。小さくてとても素敵な家とは言えないが想い出の詰まった家。その家が、そのぬくもりが結衣を守ってくれていた。あぁあの家にもどりたいな。と思っていると、結衣の目には涙があふれてきた。しかし帰っても母親を悲しませるだけ、と思い、明日からがんばろう！！とこころのなかで改めて決意した結衣は涙を拭い布団の中に入り深い眠りについた。
その日結衣が見た夢は父親と母親と結衣で結衣の入園祝いの旅行

で軽井沢に行ったときの想い出だった。”お父さん、会いたいよ。
お父さん！！！！”

「大丈夫か？」
「ぅ、うん。」
「そうか。ならよかった。」
「って・・・・！？！？！？！？！？」

「いやぁああああああああああああ！！！！」
そこには杏夜がいた。あまりにもびっくりした結衣はベッドから落ちてしまった。
「おはよう結衣。大丈夫？」
「どうしたの？な、なんでここに？」
「いや、朝ご飯だから呼びにきたんだよ。そしたらないてて・・・。」
「わた・・・俺！！泣いてました？」
「うん。なんかお父さんとか言いながらないてたよ？」
すこし落ち込む結衣に
「最近お父さんと会っていないの？」
と聞いた。
「はい・・・。いろいろあって！！まぁ俺は着替えてから行くんで。先行っててください！」
「え？着替えくらい待つよ？」
「は！？・・・・あ、いや、その俺、人に着替え見られるのはちょっと・・・・・。」
「男同士だろ？」
「いや、その・・・。とにかく！！！！先に行っててください！！」
「え？あ、・・・・・。」
強制的に杏夜を退室させ結衣は急いで着替えて顔を洗った。

第4話

天井にはシャンデリア。長いテーブルにかかる美しい刺繍が施されたテーブルクロス。優雅に食事をする男子達。ここで一言
「ここは高級ホテルですか!?!?!?!?」
そう叫ばずにはいられない豪華さに圧倒されながら結衣は3人がいるテーブルを探していると、リオが先に結衣を発見し結衣に向かって手を振っていた。
「お、おはようございます。遅くなってすいません。あ、あと杏夜?今朝は起こしてくれてありがと」
「どういたしまして。」
澄ました顔で優雅に朝食をとる杏夜。
(素敵だな。やっぱり。)
「おいっ杏夜!?一人で起こしに行くなんてずるいぞ!結衣の寝顔を独り占めするなんて・・・・・!!!!」
「リオには見せねーよ。」
「ひどっ!じゃあ紫斗は?」
「見せ物じゃねーから!!」
少しきつめの口調で結衣が言うとリオは子供のように頬を膨らませた。そんなリオを見てくすっと結衣が笑った。
「なんだよ!?」
「いや・・・。かわいいなって思って」
「は!?/////な、何言ってんだよ!?女みたいなお前には言われたくないね!」
「ってか食おーぜ!ほら結衣ここ、座って」
紫斗が結衣を紫斗と杏夜の間の席へ案内した。それに対してぶつぶつ文句を言いつつリオも朝食をとり始めた。
「ところでさ、結衣?」
「なに紫斗?」

「お前目わるいのか？」
「あーえっと・・・。うん。そうなんだよね。あはは。」
「ふーん？」
結衣はまさか昨日夜中に寝ながら無いて目が腫れたから眼鏡をかけたとは到底言えなかった。未だに不思議そうな顔をしている紫斗を前に困っていた結衣に対し杏夜が救いの手を差し伸べた。
「なんかコンタクトが未だに実家から届かなくてしょうがなく眼鏡らしいよ？」
そして杏夜はこっそりと、
(今のでよかった？)
(うん。助かった♪)
(あはは。役に立ててうれしいよ)
「おい！！何二人でこそこそやってるんだよ！？」
「あ、いや、別に・・・・・。」
「ふーん？てかさ杏夜いつの間に結衣と仲良くなったんだ？」
「うーん・・・。さっき？」
「うん。さっきだね、杏夜♪」
「ずるい。俺も混ぜてよ！」
「やだ。」
「相変わらず嫌われてんなー」
「あはは。」
「そっか！わかったぞ！このかっこいい俺様に見とれてるんだな！？そして恥ずかしくて俺と仲良く出来ないんだな！？」
俺かっこいいもんな！！と言わんばかりなリオにあきれた様子で
「男が男に見とれてどうすんだよ」
と紫斗が突っ込んでいた。仲のいい３人を見て仲のいい友達が出来てよかった、と心から思っていた。そして朝食をとり終わり皆各部屋へ戻る事になったとき結衣は杏夜に一人で結衣の部屋へ来てほしいと頼んだ。

第5話

杏夜は約束通り結衣の部屋へとやってきた。結衣の用件はと言うと、授業の無い今日学校内を案内してほしいと言う事だった。結衣は杏夜が朝食時に助けてくれたりと自分に取って頼れるのは杏夜だと思っていたのだ。杏夜はその申し出を承諾したがそれには条件があった。
「条件？・・・・・わかった。何でも言えよ？」
「何でも？・・・。僕のいる前では”本当の君”で居ろよ。」
「え？」
「僕は知っている。お前が誰にも言っていない情報を。僕は昔から君の事を見守り続けている。」
杏夜の目はいつもと違ってなんだか恐ろしかった。張りつめた空気の中、結衣は焦っていた。
(確かに誰にも言っていない。理事長か？いやそんなはずはない・・・。なら別の事か？)
「まだ隠し通そうとするの？それだったら僕は君を助けられない。」
「ごめん・・・その・・・・・。」
「じゃ、僕戻るね。”本当の君”についてちゃんと言えるようになったら僕の部屋にこい。」
そういって杏夜は結衣の部屋を後にした。結衣に冷たくあたる杏夜の顔には、何故かすこし悲しく辛い、そういった感情が現れているようだった。
杏夜が部屋を出てから結衣は考えた。本当の君＝結衣が女である事。言っても良いのだろうか、と結衣は考えた。そして決意した。杏夜の事を信じて。
結衣はドアをノックした。
「すいません！ここって杏夜くんの部屋でしょうか！？」
「あ”！？ってあれー結衣！！どうしたの？」

「いや・・・。別に。部屋間違えた。」
杏夜の部屋を探しに行こうとする結衣の腕を紫斗が引っ張った。
「杏夜の部屋ここであってんぞ？俺と杏夜は同じ部屋。ま、リオだけ仲間はずれ、ってとこかな？なぁ？」
「リオもいるんですか？」
「俺ら仲良しだから♪」
「はぁ・・・。てか杏夜！？えと・・・・・さっきの話。二人で・・・話そ？」
「だめ。僕たち全員に話してもらう。大丈夫。そしたら”僕たちの秘密”も教えるよ？」
「ｇｉｖｅ　ａｎｄ　ｔａｋｅってこと？」
そうだよと言って杏夜は紫斗とリオも部屋の中にいれた。勿論何故結衣が杏夜の部屋に来たのか知らないリオ達に、杏夜が説明をした。
そして結衣がようやく口を開いた。
「俺は訳あって本当の自分じゃない俺としてこの学校に入学した。実は・・・・俺・・・・・。」
複雑な心境の結衣は自然と涙が出てきていた。
「女です！」
「うん。だよねー・・・・・・・・・え！？」
「えーーーーーーーーー！？！？！？！？！？」
「リオ、うるせーよ。だからリオには言いたくなかったんだよ・・・・。」
「おい女の子がそんな言葉遣いしてはいけません！」
「だまれ。とりあえずだまっててごめんなさい。」
ありがとう、そういって紫斗がぎゅっと結衣を抱きしめた。
「おいっ！！紫斗！結衣からはなれろ。」
「えー？リオには関係ねーだろ？」
運命の針はすでに動き出していた。杏夜達の秘密。その事実は残酷だ。

「俺たちは人間じゃない」

彼らに隠された秘密。それは彼らが人間ではないと言う事。そしてそれは誰にも知られては行けない秘密。彼らの話によれば3人はそれぞれの族の王子で、杏夜は吸血鬼、リオはオオカミ、紫斗がライオン族らしい。驚愕の事実を前にどうすれば良いかわからず立ち尽くす結衣。

「え、えっと・・・・。」

「信じ難いだろうけど、まぁ約束だったし。今夜この部屋にまた来てくれる?絶対だからね?」

「うん・・・・。じゃ、ちょっと俺、疲れたから部屋戻る!」

そういって結衣は部屋を飛び出し自分の部屋へもどった。

「あんな重大な秘密・・・。私が抱えてた秘密なんかよりももっと重いよ。どうして、私に教えたの?怖いよ。」

結衣は布団の中に潜り込んだ。約束の時間が来るまで。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8798z/

スノーフレーク

2011年12月31日09時46分発行